

# メキシコ革命期のユカタンにおける女子教育と フェミニズム会議

松 久 玲 子

## もくじ

### はじめに

1. 先行研究
  2. ユカタンにおける社会改革と教育運動
    - 2.1 革命期におけるメキシコの教育動向
    - 2.2 アルバラドの社会改革と教育
    - 2.3 ユカタンの教育運動と合理主義教育
  3. ユカタンのフェミニズム会議
    - 3.1 アルバラドと女子教育
    - 3.2 ユカタン、フェミニズム会議
      - 3.2.1 第1回フェミニズム会議招集
      - 3.2.2 フェミニズム会議の経過と議論
      - 3.2.3 第2回フェミニズム会議
    - 3.3 公教育のジェンダー化とフェミニズム運動
- おわりに

## はじめに

1916年、ユカタン州の州都メリダで第1回フェミニズム会議が開催された。この会議は、メキシコのフェミニズム運動史上の金字塔として記録されている。エルミラ・ガリンド（Hermila Galindo）がこの会議に寄稿した演説は、フェミニズム運動において先駆的な意義を持つといわれ、フェミニズム会議において提起された法的男女平等を求めた民法の改正や女性参政権要求は、

その後の第一波フェミニズム運動の指針となった。

しかし、この会議は、ガリンドの演説に代表されるフェミニズム運動としての側面をもつだけでなく、州政府の女子教育に関する諮問会議の側面をもつものだった。会議は、当時のフェミニストたちによって自発的に開催されたのではなく、メキシコ革命のさなかに護憲派のカランサ大統領により派遣された州知事サルバドル・アルバラド（Salvador Alvarado）が招集し、アルバラドの諮問への答申という形式をとっている。主要な諮問事項は、女性の社会的役割とそのための女子教育についてである。本論文は、メキシコ革命期にユカタン州において開催された第1回フェミニズム会議の記録を洗い直し、この会議が教育会議の一環としての女子教育会議の性格をもつということ、そしてそれがフェミニズム会議として開催されたことを踏まえ、当時のフェミニストたちが公教育とどのように関わったのかを明らかにしたい。また、フェミニズム会議での議論の内容を分析し、近代公教育の形成過程において学校教育がどのようにジェンダー化されたかを考察する。

## 1．先行研究

メキシコの女性史とフェミニズム運動史において、ユカタン半島の第1回フェミニズム会議について言及していない研究はほとんど存在しないと言っても過言ではないだろう。

アナ・マシアス（Anna Macías）が著した『あらゆる不平等に抗って』<sup>1</sup>は、1890年から1940年までのメキシコのフェミニズム運動を歴史的に分析している。この中で、マシアスは、ユカタン州がメキシコ革命における急進的思想と社会改革の実験場であり、実験された急進的思想のひとつは、2回のフェミニスト会議における女性解放であると述べている。カランサによりユカタン州知事に任命されたサルバドル・アルバラドは、アメリカ合衆国滞在中に受けた影響とともに当時の社会主義の影響も受けて、さまざまな改革を実行した。特に教育改革に関心をもち、農村学校を設立するとともに、2回の教育会議を開催し、宗教と分離した教育を実施しようとした。マシアスは、1916年にアルバラドが召集したフェミニズム会議における当時のフェミニストの意識について、エルミラ・ガリンドの演説に対する反応を基に分析して

いる。エルミラ・ガリンドはユカタン州の公教育局により招待されたが、会議に出席できなかったため演説『未来の女性』(La mujer en el porvenir)を開会式に送付した。演説には、女性にも男性と同じく性欲があり自分自身のセクシュアリティを管理するために性教育が必要であることや離婚の自由が述べられ、その反カトリック的な言説が穏健な参加者たちに大きな衝撃を与えた。参加者は、大部分が女性教師だったが、ガリンドの演説を支持する急進派、反対する穏健派と保守派までのさまざまな立場のフェミニストが参加した。ガリンドの演説に対して反対意見が出され会議は紛糾したが、多くの参加者の間には、一握りの女性たちだけではなくすべての女性たちが教育を受けるべきであり、それが女性の解放につながるという合意があった。また、後の家族法の改正へと引き継がれる民法改正が提案された。第2回フェミニスト会議は、全国レベルで招集された。アルバラドはメリダの女性教師に参加を義務付けたが、参加者は1回目に比べて半減した。アルバラド自身は、この2回のフェミニズム会議の結論に満足していなかったが、フェミニスト会議の決議は後の連邦家族法の成立に大きな影響を与え、メキシコの近代フェミニズムの道標として重要な意味を持っている、とマシアスは結論付けている。

ソト(Shirlene Ann Soto)は、『メキシコ女性：革命参加の研究』<sup>2</sup>の中で、ユカタンのフェミニズム会議における当時のフェミニズム運動各派の方針の相違とその後のフェミニズム運動への影響を論じている。アルバラドは教育改革を実施し、1915年にはメキシコ初の教育会議を開催した。会議には600人以上の教員が参加したが、大部分は女性教員だった。これらの中から、フェミニスト会議のリーダーシップをとる女性たちが現れた。第1回フェミニスト会議では、ガリンドの演説により参加女性たちの間で、女性に関する観点の違いが顕在化した。3つの立場があり、ひとつはカトリック保守派でガリンドを嫌悪し演説を非難した。女性を伝統的な妻、母親役割にとどめようとし、混乱を招くいかなる提案も拒否した。急進派は、ガリンドの演説を支持し、女性は選挙権を持ち、あらゆる公職につくべきだと主張した。中間の穏健派は、女性への教育、特にアルバラドの主張する宗教と分離した教育を支持し、教育は女性を伝統のくびきから解放するものと考えた。同時に、女

性はよき妻、母となるための実践的教育を受けるべきだと考えた。急進派と穏健派は、民法改正に関して合意し、第1回教育会議の決議、つまり公教育と宗教の分離、小学校の教育改革、新カリキュラム、技術学校、共学への支持を表明した。しかし、女性の参政権に関してはフェミニストの間で合意が得られなかった。第2回会議は、11ヶ月後に開催された。法的平等を要求する演説があり、それに対して賛否両論が展開された。さらに、結婚と参政権についても意見が分かれた。二回の会議は、アルバラドが期待した結果を得られず、急進派と保守派との対立が深まった。

トゥニョン (Julia Tuñón) は、ユカタンのフェミニズム会議に先立ち、1915年にタバスコ州で知事フランシスコ・ムヒカ (Francisco Múgica) によりメキシコで初めてフェミニズム会議が召集されたと指摘しているが、記録された史料はない。トゥニョンは、女性に関するアルバラドの立場について、「基本的に女性の役割は母性であり、子どもを教育することである。そのためにセクシュアリティの知識を含んだ教育を受ける必要があると考えた。女性は、家族と労働の二つの領域で発展すべきである」と考えたと述べている。<sup>3</sup>

以上の先行研究によれば、メキシコ初のフェミニズム会議は、ユカタン州知事アルバラドのイニシアティブで実施され、アルバラドの革命運動における教育改革と密接な関係を持っていた。会議で議論された基本的なテーマは性的平等 (自由恋愛) 法的平等 (民法改正) 女性参政権であり、その後のメキシコのフェミニズム運動を方向付けたと位置づけられている。確かに、ユカタンのフェミニズム会議での議論は、その後の第一波フェミニズム運動の指針となる議論を含んでいた。しかし、フェミニズム運動を担った女性教師たちの意識は先行研究において示されたように統一的ではなく多様であり、その後のフェミニズム運動においても方向性が容易に収斂したわけではなかった。本稿では、フェミニズム会議に参加した女性教師たちによる女子教育に関する議論に焦点をあて、第一波フェミニズム運動が内包する多様な要素が女子公教育の議論にどのように現われたかを分析し、それが公教育のジェンダー化に果たした役割を考察する。次章では、女子教育に関する会議までのメキシコの教育運動を概観する。

## 2. ユカタンにおける社会改革と教育運動

### 2.1 革命期におけるメキシコの教育動向

公教育概念の基礎は、ポルフィリオ・ディアス期に形成された。<sup>4</sup> この時期に公教育制度の枠組みがほぼ完成したが、教育制度の普及は首都や都市に限定され、農村にまで至らなかった。公教育を国内に定着させるために、初等教育全国会議が1906年に計画されたが、連邦の中央集権的傾向に州が反発したため開催が遅れ、実施されるまでに4年を要した。最初の初等教育会議は、1910年9月13日から24日まで開催された。中心的課題は、教育の統一と先住民の教育だった。会議を招集した教育相フスト・シエラ（Justo Sierra）は、新しい教育の特徴について、倫理的人間の形成、愛国心、寛容に根ざし信仰を尊重する宗教と分離した教育である、と開会演説で述べた。ただし、ディアス期には教会・保守勢力との和解がみられ、近代教育の特徴である宗教と分離した教育を打ち出してはいるが、教会と親和的な関係にあった。その後、メキシコ革命の混乱<sup>5</sup>が続く中で、1911年から14年まで1年ごとに定期的に会議は開催された。1914年10月1日にイダルゴ州パチュカで開催された第5回初等教育会議では、初等師範学校の学習計画を統一するとすれば、その教育内容はどのようなものか、メキシコ共和国の学校において教育されるべき全体的性格、教科の組織化、小学校教科書を採用すべきかどうか等が論議された。

その後、カランサ大統領により、公教育芸術省（Secretaría de Instrucción Popular y Bellas Artes）の廃止が決定され、初等教育の責任が各州に委譲された。これにより全国初等教育会議に替わって、ベラクルス、ユカタン、コアウイラ、グアナフアト、ソノラ、イダルゴ各州で独自の問題を議論した教育会議が開催された。これらの州で議論された内容は、1917年憲法の制定にあたり教育条項に影響を与え、後の教育制度の形成に影響を及ぼしている。

### 2.2 アルバラドの社会改革と教育

革命の混乱期の中で、ユカタン州はどのような状況にあったのだろうか。当時のユカタン州はエネケン産業で繁栄していた。アメリカ合衆国、オース

トラリア、カナダ、アルゼンチンなどにエネケンを輸出し、地理的にも世界の工業国と接触をもつ進歩的な州だった。

カランサ大統領の命を受けたアルバラド將軍は、ユカタン州を護憲派の支配下に置こうとした。ユカタンはメキシコでも裕福な州で、改革のための財政基盤をアルバラドに与えると同時に、農民運動を率いるピジャヤサパタと戦うための軍資金をカランサ率いる護憲派に提供した。

アルバラドは、1915年から1918年までユカタン州知事を務め、その間にさまざまな社会改革を実行した。マヤ農民を奴隷状態から解放し、アセングード（アシエンダと呼ばれる大農場の所有者）から農民の債務を帳消しにし、鞭うち、後見制、子どもを親から取り上げるなどの抑圧を禁じた。ベオン（大農場で働く半奴隷的農業労働者）と家事労働者を念頭においた労働者の解放を実施した。最低賃金、最大労働時間を定め、スト権を承認し、女性、児童の労働条件、産休を定めた。ギャンブル禁止と禁酒法を定め、売春廃止に向けての方策として、まず売春婦の定期健診と更生プログラムを提供した。メキシコの民法改正に先立ち、1915年7月にはフェミニスト法と呼ばれた州の民法改正を行った。それまで、独身女性は30歳まで親の保護下におかれ親の家を離れ独立することができなかったが、男性と同じく女性も21歳で親から独立できるようになった。

アルバラドは、特に教育改革に力をいれ、1915年5月に農村教育法、同6月には公教育一般法、7月に公教育一般法細則を公布した。最初の1年間に22の教育関連の政令を発布したと言われている。当時の教育状況を見ると、1910年の12歳以上の識字率は、全国平均が28.8%、男性が33.4%、女性24.5%に対して、ユカタン州ではそれぞれ30.6%、35.1%、26.3%で、全国水準を上回っている。<sup>6</sup> 一方、州都メリダの識字率は59%で連邦区の63.3%に達する勢いである。しかし、ユカタン州は、都市と農村地域の格差も大きく、都市の学校数は363に対して、農村は17に過ぎなかった。ちなみに、ユカタン州の都市と農村の人口比率は、都市31.13%に対して農村68.57%だった。<sup>7</sup> 連邦区の都市の学校数が386に対して、ユカタン州の人口が連邦区人口の半分以下であることを考慮すると、ユカタンの都市における学校数363校は群を抜いていると言えよう。<sup>8</sup>

アルバラドが公布したユカタン州の農村教育法では、初等教育を無償教育、宗教と分離した教育、義務教育と規定し、州政府が教育の責任を持った。教育の普及が遅れていた農村地帯に農村学校を1000校以上、メリダ以外の都市にも40校を設立した。1年間で生徒の数は、2倍、教師数は68%増加した。州政府はそれまで農村学校を委託されていたランチョ経営者やアセンダードに対して、大農場に農村学校を開設するための学校費用の提供、教員・学校長の給与の支給を義務付けた。また、メキシコシティからエレナ・トーレス（Elena Torres）を校長として招聘し、1917年にモンテッソーリ学校を開設した。合理主義教育を普及させていたグループ「世界労働者の家」をユカタンにも設立した。これらの社会改革の過程で、アルバラドは、教育会議、フェミニズム会議、労働者会議を次々開催した。

まず、1915年9月に第1回教育会議が開催された。マシアスは、会議開催は、上からの改革に民衆の支持を取り付けることが不可欠であり、民衆の改革への意識を高め将来のリーダーたちを育成することが目的だったと述べている。<sup>9</sup> 会議には600人以上の教員が参加したが、大部分は州費を支給されて参加した女性教師だった。第1回教育会議では、ユカタンにおいて既に実施されていた合理主義教育を公立学校で開始することと男女共学が合意された。1916年9月にモトゥルで開催された第2回教育会議で、アルバラドは教育会議の目的は女性をカトリック教会から解放することだと宣言した。1916年には1月に第1回フェミニズム会議、12月には第2回フェミニズム会議、そして労働者会議が開催された。

### 2.3 ユカタンの教育運動と合理主義教育

2回の教育会議では、公立学校における合理主義教育の決議が行われた。合理主義教育（educación racionalista）とは如何なるものだったのだろうか。1908年にスペインのバルセロナでフェレル＝グアルディア（Francisco Ferrer Guardia）が教条主義から自由で、科学に立脚した「近代学校」（Escuela Moderna）を設立した。合理主義教育の目的は、新しい人間を形成することで、自然と社会に関する科学的知識と合理性を教え、社会的不正義と戦うためにその起源を知り、プロレタリアートの解放を目的としていた。<sup>10</sup> フェレ



ルはアルフォンソ13世を襲撃した罪で捕らえられ、スペインの近代学校の運動は終わった。しかし、合理主義教育は革命期のメキシコに伝えられ、ユカタン、ベラクルス、タバスコなどの州政府の教育政策に影響を与えた。

メキシコで最初に合理主義教育をもたらしたのはカタルニア人のフェレス (Amadeo Ferrés) とスペイン人の教師モンカレアノ (Francisco Moncaleano) である。<sup>11</sup> フェレスは労働組合主義の創始者で、ソノラ、タマウリパ、シナロア、グアナフアト州を中心に機関紙を発行し、1912年にメキシコに「世界労働者の家」を設立した。メキシコでは合理主義学校は、「世界労働者の家」で革新的な教育学の試みとして始まった。「世界労働者の家」には運輸関係の労働者や製造業に雇用されている人々、サービス関係の労働者、学生、インテリなどが集い、革命当初はカランサを支援した。「世界労働者の家」の党员たちはさまざまな州で組織を作っていたが、ユカタン州ではアルバラドにより1915年に設立された。ユカタンでは、フェレルの熱心な信奉者であった公立学校教師のホセ・デラルス=メナ (José de la Luz Mena) が、他の教員たちとともに「世界労働者の家」設立以前からも、合理主義教育を実施していた。

メネセスは、合理主義教育の特徴を以下のように述べている。<sup>12</sup> 純粹理性の哲学的方向性を持つ。進化論の生物社会学的原理に基づく教育を与える。中立あるいは非宗教的というより反宗教的特徴を持つ。合理主義学校だけが宗教的偏見のくびきから人類を解放できると考えた。自由で強健な新しい世代を教育することを目的とする。一年生の教育は、言葉より活動を通じて、自然の観察により単純でよく知っている対象物を分類することから始まる。教育は実践的で、職業教育と結びついている。学校は、調理室、遊戯室、音楽室、図工室、さらに写真室やタイプ室からなり、プログラムにしたがって教育するのではなく、児童の興味を中心に展開される。教育は、デューイの教育論やオーウェンの社会主義を視野に入れ、この時代の新しい教育的潮流を取り入れたものだった。既存の暗記主義の教育を「監獄の教育」と批判したが、それは当時の教育を支配していたカトリック教への批判そのものだった。メキシコ革命の中の社会変革を求める運動と教育運動が結びつき、合理主義学校運動が、反カトリック、革命運動の拠点となっていったこ



とは想像に難くない。

2回の教育会議での結論は、以下のようなものだった。州の初等学校を組織する基本的原則は「自由」である。自由を得るために、子どもは心理的・身体的発育の生得的必要性を満たす環境にいることが必要だ。子どもの発育のための環境は、農場、作業場、工場、実験室、生活である。この目的を達成するために、現行の小学校は前述の環境に変わらなければならない。

教師の教育的使命は、合理主義教育へと導く教育研究の発信者になることである。児童は自由と作業への関心によりエゴイズムを家族愛、同胞愛、人類愛に替え、進歩の要因となる。<sup>13</sup> 教育会議では、合理主義学校と男女共学が支持された。

### 3. ユカタンのフェミニズム会議

#### 3.1 アルバラドと女子教育

1916年に2回のフェミニズム会議がアルバラドにより召集された。フェミニズム会議を提案したのは、一説によると大統領カランサの秘書で民法改正に大きな影響を与えたエルミラ・ガリンドだといわれている。しかし、実際はユカタン州の公立学校教師の発案で、彼と親交のあったエルミラ・ガリンドがアルバラドにその考えを伝えた。アルバラドは、先の教育会議に出席したコンスエロ・サバラ＝イカスティジョ（Consuelo Zavala y Castillo）を責任者に任じ、教育会議に出席した何人かの女性教師たちがフェミニズム会議の準備にあたった。

ユカタン半島には、女子教育の先駆的活動があり、1870年にリタ・セティエーナ・グティエレスが「ムギワラギク」（Siempre viva）という雑誌と同名の私立女子学校を設立した。1886年にこの私立学校の後身であるユカタン初の公立女子中等学校「女子文芸学校」が設立された。1890年に、女子師範学校設置令がメキシコ政府により公布されるが、それに先立ちユカタンでは「女子文芸学校」出身の女性教師が輩出していた。ユカタンの多くのフェミニストたちはこの系譜に連なっている。1900年の時点での教員数を見ると、ユカタン州では男性257人、女性198人、総数455人で専門職の中では教職が最も高い割合を示している。弁護士146人、医師117人、仲買人48人が次に続いた。

中間層の女性には教師以外の職は限られており、上述の専門職の中で女性は仲間が29人いるに過ぎなかった。ちなみに、連邦区の教員は男性137人、女性188人、総数325人で、専門職としては最も多い弁護士826人（内女性は2名）医師526名（内女性4名）で、その次が教員だった。連邦区と比べると、ユカタン州では中間層である専門職の職種が首都圏に比べ限定的だったことがわかる。1910年には、ユカタン州には公立学校430校、私立学校14校があり、教員数は1132人、このうちの635人、つまり半数以上が女性だった。<sup>14</sup>

ユカタン州において、ディアス独裁政権期に生まれた中間階層の中核をなしたのはこのような専門職層であり、また既存の大農場や大土地所有者の支配体制に異を唱え、社会主義や新しい教育思想の影響を受けつつ、変革の前衛となったのもこれらの人々だった。アルバラドは、カランサ大統領により派遣された未知の土地で、社会改革を実施するにあたり教師たちを中心とする社会主義者たちの支持を求め、教育会議を通じて教師たちを意識化しようと考えた。

アルバラドは、社会変革のプログラムの中に、当初から女性の解放を組み込んでいた。トゥニョンが指摘したように、アルバラドは女性の役割として家族領域に比重をかけつつも、労働領域における女性の発展を考えていた。

「女性はそのもっとも価値ある社会的機能を家庭において果たすのだから、女性の人生で結婚が優先的目標であるのは当然である。」「人としての教育、すなわち人生を共にすることになる男性の教養水準まで引き上げ、倫理的、知的人間にするための育成、これが必要である。」また、「結婚は、恋愛中の一瞬に起こるのと同じように、嫌気がさした一瞬に、あるいは夫の死など女性を元の独り身にしてしまう無限の要因のどれかによって壊れるものである。そのような時、女性は再び自活しなければならない上に、おそらく子どもを養っていく必要にも迫られる。」「男性に対して何らかの技能を身につける必要性を提唱したのとまったく同様に、女性にもそれを称揚する」「女性は、十分に教育を受け自己形成した上で、パンを勝ち取るための戦いに参加するべきである。」<sup>15</sup>

アルバラドは本質主義の立場をとりつつも、当時の女性の置かれた結婚における不安定な状況を認識し、家父長的な温情主義ではあるが、必要に迫ら

れた場合の女性の自立を教育により保障するという考えを持っていた。

政策としては、初等教育の男女共学を実施した。当初、小学校の4年まで共学を導入したが、親の強い反対に会い2年までに縮小した。夜間学校を開設し13歳から21歳の若者に読み書き、計算、公民、メキシコ史の学習を義務付け、従わない場合には罰則あるいは罰金を課した。しかし、子どもを持つ母親だけは免除された。また、既存の女子教育に批判的で、公立学校には女性が家族の世話、あるいは生計を立てるための十分な教育が行われていないと批判し、家政科やタイプ技術が学べる家政職業学校（Escuela Vocacional de Artes Domésticas）設立などにより女子教育を振興した。家政職業学校には230人の女性が就学した。労働分野においても矢継ぎ早に改革を実行した。最低賃金、最大労働時間、産休など女性労働者のために画期的な労働法を1915年に制定した。1915年3月にタバコ工場の女子労働組合が組織され、家事労働者の待遇改善が行われた。<sup>16</sup> 会計係、秘書、クラークなどとして役所で女性を雇用し、女性の雇用を促進した。

アルバラドは、亡命したアメリカでの経験と社会主義の影響により、教育と労働の分野において当時としては革新的な女性解放政策を実施した。アルバラドの女性解放にむけた政策の受け皿となり、実質的な活動を担ったのがユカタン州の先進的な女子教育を受けた女性教員たちだった。アルバラドがユカタンのフェミニストと出会うことで、フェミニスト会議の条件は整った。

### 3.2 ユカタン、フェミニズム会議

#### 3.2.1 第1回フェミニズム会議招集

アルバラドは、1915年10月28日に、フェミニズム会議を召集する通知を護憲派の広報誌『革命の声』（La voz de la revolución）に掲載した。<sup>17</sup> 召集通知前文に、女性が新しい世代を養成し、子どもの教育の手本となるように法律上の身分、公正な権利と教育の獲得が必要であり、そのために女性を解放し教育するための手段を諮問すると述べた。

参加資格は、初等教育修了程度の知識を持つ者とされた。会議の代表者には、旅費と滞在費が州政府から支給された。会議での決議は、州政府が決議案を元に事前検討を経て、「後に法律の範疇に格上げされる」ことが明記さ

れている。会議は政府の諮問機関として、公的な性格の強いものであり、「初等教育修了」という参加資格から、この会議が新興の中間層以上の女性を対象としていたことがわかる。

諮問事項は、以下の4点である。

1. 伝統のくびきから女性を解放するためにとられるべき社会的方策は何か。
2. 女性の正当な権利要求において、生きていくための準備をすることを目的とする小学校の担うべき役割は何か。
3. 進歩の著しい現代生活に順応できるよう女性に力をつけることを目指し、州政府によって振興されるべき学問や職業とは何か。
4. 女性が社会で指導されるばかりでなく、指導者たるために担いうる、また担うべき公的役割とは何か。

諮問内容は、社会変革の中で流動しつつあるメキシコ社会における新しい女性像と、新しい女性を育成するために公教育において何を教育すべきかを問うものである。開催は周到に準備され、理事会、各諮問を答申するための委員会の構成についても通知書において規定されていた。組織委員会委員長には、コンスエロ・サバラが選出された。サバラは、女子文芸学校出身の教師で、アルバラドがユカタンに着任する以前から、宗教と分離した、近代的、民族的カリキュラムをもつ私立学校を設立し、第5回全国初等教育会議にも参加していた。<sup>18</sup>

1915年11月13日、メリダ市内の女子市民中央学校で執行部を組織するための最初の会合が開かれた。授業代行を置き女性教員の参加を許可するよう州の教育局に要請が出され、タイプの貸し出しとタイピスト2名、鉄道パスの提供、大会準備のための500ペソの予算措置がとられた。以後4回の会議が11月中に持たれ、プログラム、4つの諮問事項検討のための責任者の決定などが行われた。12月には、教育局長との協議が行われ、会期中参加者には10ペソの手当てと鉄道パスの支払いが合意された。会議参加者のための施設の手配に、職業学校から2名の教師が授業を免除されて参加した。1916年にはいり3回の会議が開催された。ガリンドを招待することが決定されたが、来場できないため送付されたガリンドの演説を見て、その対応が議論された。

内容が急進的であるために論議を引き起こしたが、執行部は開会演説ではなく個人演説として扱うことを提案した。また、各部会の代表委員の任命が行われた。正式の委員とならない場合は、日当と出張経費が支給されないため、代表者の決定は重要事項だった。教育局は開催中、女子中学校を休校する措置をとり、宿舎として使用される学校も休校とすることが決められた。開会準備のために、計10回の会合が重ねられ、教育局の全面的な後援の下で会議が準備された。事前に各諮問に対応する部会において答申の原案が練られた。

### 3.2.2 フェミニズム会議の経過と議論

フェミニズム会議は、1916年1月13日から16日にかけてメリダ市のペオン・コントラス公会堂で開催された。以下、第1回フェミニズム会議の記録<sup>19</sup>を元に、会議経過を見てみたい。会議には、617人の代表が参加した。大部分は、富裕層でもなく貧困な農業・工業労働者層でもない中間層の教師だった。会議は、午前と午後に別れ、計8回のセッションが行われた。各諮問に対して組織された4つの委員会の原案をめぐり順次討論が行われ、先回のセッションで討論した内容に対して、毎回、記録の確認と挙手または記名投票により決議を採択するという手順を経て、アルバラドに対する答申が作成された。

#### 【第1日目】

1月13日午前のセッションでは、執行部と3人の候補者の中から委員長としてアドルフィナ・バレンシア＝デアビラ（Adolfina Valencia de Avila）が選出され、開会式が行われた。午後の部は3時から開始され6時に終了した。開会演説の中で、ユカタン州教育局からフェミニズム会議に招待されたが、来場できなかったエルミラ・ガリンドの演説『未来の女性』<sup>20</sup>が代読された。ガリンドの演説に対し、内容が不道德だという非難があがった。一方で、「合理主義」の新しい独創的なモデルを提供するものだという擁護意見も出された。手稿に修正要求が出されたが、本人の不在のため不可能であることから、州政府により刊行される予定のパンフレットに掲載すべきでないという意見が出され、可決された。

この演説は、いくつかの先行研究においてフェミニズム会議の中心的テーマとして扱われている。ソトは、ガリンドの演説について、「女性は男性と同じ知性を持っている。したがって革命の要職に迎えられるべきだと主張した。しかし、もっとも衝撃を与えた部分は、女性は男性と同じく性的自由を持つべきだと述べたことだった。性教育を要求し『道を外れた女性』の更生を主張した。」<sup>21</sup>「ガリンドの演説は代表たちを二分した」と述べている。

同様に、「ガリンドの演説は…女性は男性と同様に性欲があり自分のセクシュアリティを管理するために性教育が必要である」と述べ「離婚や反宗教的言説が穏健な女性教師たちに衝撃を与えた。」とマシアスは述べている。北條ゆかりは、ガリンドが当時まだ普及していなかったフロイド理論に精通しており、女性の性的欲求の当然性を強調することが、ガリンドのフェミニズム思想の出発点だったと指摘している。<sup>22</sup>

ガリンドは、演説で「女性が種の保存のために性的本能を男性と同様に持っている」と述べている。護憲派の反教権主義の文脈で見れば、ガリンドは、精神的側面を称揚した無垢な女性、精神的母性というカトリック教会によって規範化された女性像を否定し、生物の本能として性欲をもつ女性像を提示したと言えよう。そして、「誤って理解されているつつしみの概念と古くからの偏見によって、女性は有益でしかも不可欠な知識を得られずにいます」と、教会に支配されていた既存の教育を批判する。ガリンドによれば、「女性は知識を獲得することにより、性的欲求をコントロールする」ことで、心と体の調和の取れた発達が可能となる。

さらに、ガリンドは、優生学的な立場から優良な国民の形成を視野に入れ女性の教育を論じている。「これら（生理学、解剖学的知識や衛生問題など）の学問的知識は中等教育機関において本来なら扱われるべき」であるが、家庭においてこれらの知識が避けられている結果、「人種の劣等化に拍車をかけ」「祖国のために活力ある人間をもたらすことができないのです」。「人口減少と人種の劣化という、一国にとって起こりうるもっとも重大な危機をもたらすものですから、その解決策を模索する義務が革命運動を担う思想家や政治家、立法者にあるのです」「妄信的な先入観を壊し、古くからの憂慮を根こそぎにするであろう新風は、家庭の内部までは届かないでしょう。この

高貴で崇高な使命はメキシコでは女性にかかっています」女性が理にかなった生活形態を獲得すれば、「私達メキシコ人の人種の改善は次世代以降驚異的に実現していくでしょう。」と演説を結んでいる。

ガリンドの演説には、当時の優生学的な出産管理の影響を見て取ることができる。『未来の女性』を女性の教育という側面から読み解くなら、子を産み育てるという女性の生殖的機能の自己管理に着目し、人口の増加と人種の改善を革命政府の国家的課題のひとつとして捉え、教育を通じて優良な国民の形成に寄与することを女性たちに呼びかけたと考えられる。その中で、性教育の導入は、優良な国民の再生産のための重要な要素として女性に提示されている。午後のセッションでは、第1テーマに関する議論が開始された。

## 【2日目】

2日目に入り、14日午前のセッションでは、ガリンドの演説をパンフレットから削除する決議に対してガリンドを支持する急進派から抗議が出された。議論は決着を見ないままに、第1テーマ「伝統のくびきから女性を解放する方策は何か」の議論に移った。

検討委員会から以下のような答申案が出された。

- ・ 小学校では、女子に人間と宗教の真の起源に関する知識を提供すべきである。
- ・ 国家は前述の結論を可能にすることだけを目的とする女性のための大学の公開講座あるいは講演会を設立するべきである。
- ・ 女性の本質と女性の中に起こる現象の知識を女性がもつべきである。女性が妊娠する機能を得るとき、あるいは既に得たときには必ず、これらの知識は、高等小学校、師範学校、中等学校で得られねばならない。
- ・ 義務が自主的かの性格の別なしにあらゆる文化機関で、女性の実力と能力の多様性、そして従来の男性によって占められていた職業への採用の可能性を認識させる。
- ・ 女性に対してより広範な自由と権利が与えられ、その自由によって新たな目標の達成を目指すことができるよう、政府に対して現行民



法の改正を交渉する。

と は承認されたが、 、 、 は否決され、修正が加えられた。宗教について教える必要はないという意見と、宿命論から女性を解放するために宗教教育は私立、公立学校で廃止すべきだという強い意見が出された。また、必要があれば自活を可能にするような教育を与えられるべきであるという意見が述べられ、以下の修正案が答申として可決された。

- ・ 義務が自主的にかかわりなく、あらゆる文化機関で女性の実力と能力の多様性、そして従来男性によって占められていた職業への採用の可能性を認識させる。
- ・ 女性に対してより広範な自由と権利が与えられ、その自由によって新たな目標の達成を目指すことができるよう、政府に対して現行民法の改正を交渉する。
- ・ 宗教と分離した教育は既存の事実であるが、今後はその真価が問われる。
- ・ 幼児には理性と自分自身による判断能力に欠けるためよく検討せずに何もかも受容してしまうことになるから、18歳以下の子どもへの教会での宗教教育を回避すること。
- ・ 道徳、人間の本質、連帯意識という高尚な基礎知識を女性に教え込むこと。
- ・ 女性に自己の行動の責任を理解させること。「善そのもののための善」
- ・ 女性を自由思想へと駆り立てるような社会主義的傾向の催しを奨励すること。
- ・ 「目には目を、歯には歯を」のような永遠の同害報復をあたえるような恨み深く激しやすい神への恐怖心を子どもの頭から払いのけるために、学校において定期的な講話をすること。
- ・ 必要な場合、自活を可能にする職業を女性がつまようようにすること。
- ・ 男女が対等で困難にも補完的に対処できるよう、女性に知育を施すこと。
- ・ 若い女性が結婚するとき、結婚とは何か、自分の義務は何かを理解

しているようにすること。自己の良心のみが贖罪師であること。

原案の 性教育に関係する条項は排除され、結婚における男女の平等な結びつきが強調された。また、教育における反教権的姿勢が強く打ち出された。

次に第2テーマ「小学校の担うべき役割」の議論が開始された。答申案は、以下のとおりである。

- ・既存の学校をその教科書や口頭で行われる授業内容もろとも即時廃止し、自由で利益のある活動を展開する合理主義的教育機関によって代替する。
- ・手作業を通じた有益な科学に携わる機関は、合理主義学校である。
- ・生活を充足させ、将来にむけて準備する必要性を生み出すために行われる労働は、幼児期の手作業である。
- ・これらの幼児の必要性とは、女子の場合、主に、いわゆるお人形遊び、ままごとの中で示される。
- ・学習者が獲得するあらゆる知識の中で、あらゆる自由な行動における活動が不可欠な動因であるとき、合理主義教育が行われるだろう。
- ・この教育の結果は、学校の内外での学習者の人格的發展であり、また堅固な意思を作ることである。
- ・この教育の改善のために、自然への憧憬を軽蔑せず、それを生産の要因となるようなものとして理解しなければならない。
- ・このように教育された女性は、愛国心と独立した自由な生活を目指して男女が強力な一体となり、男性を力づけるのに貢献する。
- ・主として教師と親が参加する講演会を開き、調和と権利・義務の意識が優位を占める社会へと子どもたちを導く、完全なる自由を基盤とした合理主義的教育が追求するこの上なく高貴な目標をめぐる両者が理解しあうようにする。

答申案に対し、「合理主義教育」について質問が出された。ユカタンでは既に合理主義教育が実施されているという意見と、合理主義学校は十分に周知されていないので会議を開催し準備した後に実施されるべきであるという意見が対立した。さらに、合理主義教育に対する定義が行われてしかるべき

という意見が出され、その点について合意が成立した。

### 【3日目】

1月15日は、前日の議事録が読まれ、第1テーマについては異議なく議決された。次に、前日の質問に答え合理主義学校が紹介された。教師に合理主義学校の説明をする会議なしに合理主義学校の設立はできないという提案がなされ、付記をつけた上で、三回の投票の結果、合理主義学校の設立が承認され、以下の答申が可決された。

- ・主として教師と親が参加する講演会を開き、調和と権利・義務の意識が優位を占める社会へと子どもたちを導く、完全なる自由を基盤とした合理主義的教育が追求するこの上なく高貴な目標をめぐる両者が理解しあうようにすること。

既存の学校をその教科書や口頭で行われる授業内容もろとも廃止し、自由に利益のある活動を展開する合理主義的教育機関によって代替すること。

同日は、さらに、第三番目のテーマ「州政府によって支援されるべき女性のための学問および職業」についての答申案が出された。

- ・絵画への愛好心を育てるために、直ちにドローイング、絵画、彫刻、装飾の専門学校を創設すること。ならびに州の主要な市町村に音楽学校を開くこと。
- ・美術、音楽学校および師範学校に弁舌、吟唱の授業を設けること。
- ・専門学校においては、写真、銀細工、サイザル麻繊維工芸、印刷、製本、リトグラフ、活版、銅・銅版画、フラワー・アレンジメント、陶芸の授業が開講されること。
- ・共学の農場つき学校の数のできるかぎり増やすこと。
- ・講演や新聞記事を通じて女性の医学と薬学への志向を促進すること。
- ・文学への関心、および衛生学、芸術など女性の躍進を増強するあらゆる分野に対する著作活動への関心を育成すること。

この提案に対する意見で、共学について「共学の学校では、女性の真の権利回復が始まるでしょう。共学の学校はこの社会的発展に重要な役割を果た

すものです。」という意見が述べられた。また、エリート女性には職業学校や専門学校があるからそこで学ばよく、「大部分の女性は結婚し家庭に入るのだから」、女子教育の基礎として、「女子にしっかりとした基礎的な教育と上級の教育を与えること、理論より実践を与えること。あらゆる食事を作り、おいしい菓子作りを教え、一人で買い物に出かけ、家事を差配し、裁縫を教え、主婦となるように女性を教育すること。菜園は多くの家族に食料を供給するだけではなく、外国にバナナやトマトのような果物を輸出することができる。」という意見が出された。補足的意見として、「合理的で科学的方法で家庭の母としての使命を果たす目的で、女性を家庭のために教育することと、必要な場合自分自身で生計を立て生きていくために女性を教育すること」を目的とするという意見が出された。<sup>23</sup> 会議において、家族の再生産領域における主婦の役割が女子公教育の概念の中に言説化された。従来から慣習的に女性に再生産労働が課され、大多数の農村女性は農場での労働とともに生活の一部として果たしてきた役割が、女子教育の議論のなかで言説化されたことはジェンダー役割の規範化への一段階であり、家庭において男性の良き伴侶として家事を担う中間層の主婦像が州の公教育に導入された。

答申には、の項目に「教師の報酬は、男女同一賃金であること。これらの科目を履修したい州内出身の若い女性のために奨学金を創出し、全科目にわたって夜間授業を併設すること」が付け加えられ、第3テーマの答申は満場一致で可決された。

#### 【4日目】

16日は、教育局長の臨席の下で開催された。前日の合理主義学校に関する議論について、「カリキュラムも時間割もない合理主義学校を認めない」という意見を記録にとどめるべきだという要求が出されたが、多数決で第3テーマの答申は承認された。次に第4テーマ「女性が担うべき公的な役割は何か」についての答申案がフスト・シエラの言葉を引用しながら発表された。

- ・男性が毎日生きるために取り組んでいるあらゆる活動領域の門戸を女性に開放すべきである。
- ・知性に男女の間の差異はなく、女性社会の指導者たるために男性

と同様の能力を有しているため、特別に体力を要す職でさえなければ、如何なる公職もこれからの女性は担うことができる。

については満場一致で承認された。しかし、 について議論は紛糾した。保守派からは、立法は軍役につける者（男性）しか担うことはできないという意見が出され、それならば女性も戦場に行くことが必要だし、実際に戦場に赴いた女性もいるという反論が出された。また、子どもの教育の責任は母親にあるので、既婚女性は働くことができないという意見が述べられた。急進派は、決議にいかなる留保もつけるべきではなく、市町村の選挙権を要求すべきだと主張した。穏健派は、まだ女性は選挙権を得る準備ができていないから、「未来の」という言葉を入れることを提案し、会議で承認された。しかし、選挙権を要求することに対して、31名から抗議の署名が提出された。

午後のセッションでは、カランサ大統領の率いる「社会革命プログラムに従い、解放された市町村は、自由な州と国家を保証する民主主義の学校である」ことが強く主張され、以下の提案が出された。

- . 21歳以上の女性は議員になることができるように州法を改正する。
- . 21歳以上のすべての女性は市町村の選挙権、被選挙権をもつ。
- . 州政府は州法に従い、共和国憲法の改正を要求し前2項の承認を求める。
- . 第4の諮問に以上の事項を加える。

4日目の午後は、帰途につく女性たちが多く、参加者が少ない中で以上の提案が出され、閉会式が行われた。女性参政権の議論は次回のフェミニズム会議にもちこされた。

民法改正については賛成が得られたが、合理主義教育の即時遂行、女性参政権と公職というアルバラドの方針にとっては、フェミニズム会議の答申は十分満足のいくものではなかったが、アルバラドは、カランサに以下のような報告を送った。

「聴衆は熱心に女性の宗教的狂信をより少なくする社会的条件を改善するためのもっとも適切な方法を議論しました。感動する演説が熱心に行われました。革命の新たな勝利であることを報告させてください。一年前に到着したときには、公共の場にわずかの女性しかいませんでした。」

### 3.2.3 第2回フェミニズム会議

第2回フェミニズム会議は、11ヵ月後に全国レベルで招集され、1916年11月23日から12月2日までメリダの家政職業学校で開催された。参加者は236名で、他州からはほとんど集まらず、会議自体が縮小した。アルバラドはメリダの女性教師に参加を義務付けた。

執行部が選出され、第一回会議の委員長選で次点だった急進派のボルフィリア・ロサーダ＝デアピラが委員長に選出された。エルミラ・ガリンドの演説が再び送付された。ガリンドは、第1回フェミニズム会議に向けて送った『未来の女性』の演説について弁明を行い、新たに女性参政権獲得の必要性について論じた。ガリンドは、先の演説が自由恋愛を擁護するものではないことを述べ、さらに結婚観を以下のように述べた。

「女性が都合のためだけに、愛してもいないか嫌ってさえいるかもしれない男性と家族をなそうとすることも、私は断じて容認しないからです。愛がないのなら結婚は取引に過ぎませんし、家庭は美德が培われ将来の世代の魂と強靱な人格が形成されるあらゆる親密な愛情の収穫である代わりに、地獄になってしまいます。」<sup>24</sup>

また、性教育についてはほとんど触れず、かわりに「女性は（自然）淘汰の行為において、ほぼ直接的な介入をすることで（社会に）有効な貢献をすることが可能です。」と述べ、出産管理の問題を離婚の合法化にすり替えて議論を展開した。また、立法に女性が参加する必要性を訴え、女性参政権の獲得、つまり第4テーマの公職を担うことに「これからの女性は」という言葉を入れることで先延ばしした第1回会議の決議に不満を表明した。

第2回会議の議題は第1回会議に並行するもので、小学校教育、結婚、離婚、親と子どもの権利、女性参政権と公職だった。フェミニストから法的平等を要求する演説と、メキシコ革命のリーダーたちが強調した平等の理想と革命による恩恵からの女性の排除との矛盾が指摘された。この演説の後、会議は紛糾し離婚と選挙権で意見が分かれた。サバラが会議を欠席したため穏健派はリーダーを欠き、議論の末に147対89で市町村レベルの女性の参政権は承認されたが、被選挙権は否決された。

### 3.3 公教育のジェンダー化とフェミニズム運動

ユカタン州で開催されたフェミニズム会議は、先行研究で指摘されるように法的な男女平等という民法改正への流れを作り、女性参政権に関してはフェミニズム諸派の意見対立が見られたものの1930年代の女性参政権運動への先鞭をつけ、メキシコのフェミニズム運動において重要な道標となった。

この会議をメキシコの近代公教育形成の視点から見ると、メキシコ革命を契機とする社会変革の中で、近代公教育を確立するための全国初等教育会議、地方による一連の州の教育会議の一環として、ユカタン州で女子教育に関して独自の展開が見られたということができよう。社会変革を促す教育運動と護憲派のアルパドがユカタン州で出会ったことにより、州公立学校で合理主義学校が受け入れられた。この背景には、既存のカトリック教会の教育への影響力を排除し、社会変革を支持する新しい世代を育成しようとするアルパドの狙いがあった。アルパドは、社会変革を担う女性教師たちを対象としてフェミニズム会議を招集し、公教育における女性の教育のあり方を諮問した。

フェミニズム会議を女子教育の側面に焦点をあてて分析してみたい。フェミニズム会議では、一握りの女性たちが教育を受けるのではなく、すべての女性に教育を授けるという点において、全参加者の合意があった。<sup>26</sup> 問題は、いかなる教育を女性に授けるかである。会議では、明らかに前年の教育会議で決議された合理主義学校への支持を参加者の女性教師たちから取り付けようとする意図が見られる。しかし、合理主義教育あるいは合理主義学校という名の下にどのような教育を実践するかという十分な合意はまだ女性教師たちの間には見られなかった。主に州の教育会議に参加した女性教師たちによって構成された準備委員会の作成した答申案と、フェミニズム会議で決議され答申された内容を比べると、答申として削られた部分に護憲派アルパドの構想と女性教師たちの認識の隔たりが見られる。

まず、答申にいたる議論を検討してみよう。最初のテーマ、「伝統のくびきから解放するための方策」では、宗教教育とガリンドの提起した性教育の問題が論議の中心となった。まず、宗教と分離した教育に関しては、すでに



フアレス大統領時代に公布された自由主義憲法によって明文化されており、この概念は認知されていた。会議では、それを学校教育においてどう実施するかが議論され、長い間教育を支配してきた教会とその教育を一掃するという方向性が支持された。「合理主義学校」への全面的支持は得られなかったが、議論により合意されものは、宗教的ドグマから解放された「科学的知識」に基づく内容、教師の教える内容の口述筆記ではなく行動を通じた学習、特権階級に独占された教育ではなく民衆の教育である。フェミニズム会議参加者の中に合理主義学校に対する認識のばらつきがあったが、以上の点については、メキシコ革命における教育を通じた社会変革に対する護憲派とアルバラドの政策は支持されたと見えよう。

一方、ガリンドの提起した問題は、愛情により結ばれた夫婦という新しい結婚観、近代家族の方向性を示したと考えられる。それは、ガリンドの第2回フェミニズム会議における弁明演説の中にも見て取れる。ガリンドからの問題提起を受けて、愛情に基づかず経済的な安定を得るための結婚という旧来の結婚への批判と、そうした結婚を打ち破るために「必要な場合」つまり結婚が事実上破綻した場合には、女性が自活できるような教育の必要性が答申の から に加えられた。しかし、 の性教育に関わる内容に関して、「女性の本質と女性の中に起こる現象の知識」が漠然とした「道徳、人間の本質、連帯意識」あるいは「自己の行動への責任」などにすりかえられている。女性のもつ生殖に関わる権利を公教育の中にどのように組み入れるかは、現在に至るまでメキシコにおいて議論が続く問題である。カトリックの伝統の中で、国家による人口管理と女性の性と生殖に関わる権利は、当時の段階では議論の対象にさえならなかった。ガリンドの演説への非難と答申案の削除がそれを語っている。女性が子どもを産み育てることは「自然」とされ、家庭における再生産役割を積極的にひきうけることが近代国家の形成における女性の社会的役割であることが会議での一般的認識だった。しかし、この問題は、メキシコの公教育の議論の中で現れては消え、消えては現れる問題だった。ついに、1930年代のカルデナス大統領時代に「性教育」が公教育に導入されることになるが、それは当時の教育相ナルシソ・バッソルが失脚するきっかけとなった。ここでは、初めて公教育における性教育の概念が、

国家の人口管理、優性保護の文脈において現れたことを指摘しておきたい。

第2のテーマ「小学校が担うべき役割」では、「合理主義学校」の枠組みの中での女子教育の具体的な実践が答申案に盛り込まれたが、その部分は決議ではすべて削除されている。理由は、合理主義学校の教育実践が教育方法論として明確ではなく定着していないということで、既存の学校の暗記主義や口述筆記的な授業内容は否定されたが合理主義学校に代替するのは「即時」ではなく、教育内容や方法に関する周到な準備を経てからとなった。答申案に示された合理主義学校の女子教育の内容は、基本的に近代家族の中で主婦が果たす役割を、生徒の活動を通じて学習させるという考え方であろう。第3のテーマ「政府によって振興され支援されるべき…学問や職業」とあわせて考えると、中産階級の女性の教育としての音楽、美術、文学という教養的内容が入り、一方で「必要な場合」に立ち到った時の職業教育が構想されている。前提としては、女性が家庭の中にいることがもっとも望ましい状態であり、家族に奉仕するために実際の活動を通じた家政管理の必要性が提案されている。共学の農場つき学校（Escuelas-Granjas）の増設が答申に入れられているが、農場つき学校の口頭説明には、農場つき学校では教育と共に家事や家内の仕事を学ぶが、その内容は家族のためにおいしい食事を作るための料理、菓子作り、家庭菜園作りと作物の加工、蚕や養蜂などで、共学にすることで将来男女が協力して家庭を築き、女性は良き妻、良き母となる準備をすることができると述べられている。公立学校の女子教育の内容に、家庭における具体的な再生産労働が提示されている。しかし、現実には主婦として生きられる女性ばかりではないために、「必要に迫られて」女性が生計を立てねばならない場合、女性は教育を受けることにより職業を持つことが可能となり、子どもとともに悲惨な生活を免れることができる。つまり、女性の理想的な場所は、まず家庭で、そのための教育が第一義的に行われ、次善の策として生計を立てられるような職業教育は二義的なものと考えられた。

第4のテーマ「女性が担うべき公的な役割」では、知的に男性と平等である女性は男性が担うあらゆる職業、公職につくことが可能であることを認めながら、男女の公的領域と私的領域の棲み分けの均衡を根本的に壊す選挙権については、会議は非常に慎重な態度を表明した。

ポルフィリオ時代には公教育の枠組みが形成され、教育による女性の「尊厳の獲得」が叫ばれた。教育を受けることにより家庭での劣等性を跳ね除け夫と平等な関係を築こうとした。この中で、初等教育における女子教育に家政科の概念が入れられたが、具体的な内容が公の場で議論されてはいなかった。フェミニズム会議では、ポルフィリオ大統領時代のジェンダー役割を女子教育の中に継承しつつ、公教育において近代的家族の女性のジェンダー役割を明示化し、そのための実践的な訓練を小学校教育で行うという方向が示された。ユカタンの女性教員に代表される中間層の女性たちは、公教育における女子初等教育の役割を議論し、女子公教育を担うことによりメキシコ革命を契機とする新しい社会の建設に積極的に参加しようとしたと言える。フェミニズム会議では、反宗教教育の立場をとる合理主義教育の全面的な支持にはいたらなかったが宗教と分離した教育を支持し、カトリック教会に支配された受身の女性像から脱却した近代家族における女性のイメージを公教育の中に具体化しようとした。女子教育を通じて、家庭という場から社会の進歩に積極的に貢献しようとしたのである。

第二波フェミニズムの視点からみると、フェミニズム会議で導かれた近代公教育における女子教育は、ジェンダー役割を固定し、女性を私的領域に囲み込むことに手を貸したといえるかもしれない。しかし、第一波フェミニズム運動と第二波フェミニズムの間には、担い手たちのジェンダー意識の上に大きな隔たりがある。フェミニズム運動は、時代に規定されながら発展を遂げて来た。私的領域への女性の囲い込みとそれを反映したジェンダー規範は近代社会の産物であり、教育を含めた近代化の過程で形成された。ジェンダー規範そのものが時代とともに変化してきたが、近代化への歩みが始まったメキシコ革命の過程で、会議参加者である女性教師たちは、公教育において近代家族における女性の役割を規定することによりまず家庭における男女平等の関係を構築しようとした。社会階層だけではなく男女により異なる複線的教育システムが、近代公教育形成の過程で公教育において単線化されたが、統一された同一の教育システムにおいて男女により教育目的は異なり、それに従う教育内容の差異化という学校教育のジェンダー化が行なわれた。第一波フェミニズムにおいては、男女は本質的に異なりそれに基づいた性役

割が存在するという本質主義が前提であり、フェミニストもその前提に疑問を差しはさむことなく、女性の教育を拡大するために「差異の上の平等」を教育において推進しようとしたのである。第二波フェミニズムが現代のジェンダー規範を打ち崩したように、当時の第一波フェミニズムは、教会のくびきを打ち払い教育を教会から解放し、「愛情」に基づく近代家族において再生産役割（出産と子どもの社会化）を構築することにより近代メキシコ社会における女性の地位を確保しようとした。フェミニズム会議では、公教育の枠組みの中でジェンダー役割が議論されることにより、国家によるジェンダー規範の制度化への道筋がつけられた。ユカタンの多くのフェミニストたちは、教育を通じて国家の建設に積極的に加わることで女性の人権を拡大することを目指したのである。それは、フェミニズム運動の「退行」ではなく、近代の申し子であるフェミニズム運動の社会運動としての一段階だったと考える。

## おわりに

アルバラドがケレタロの制憲会議の決定により被選挙権を失ってユカタンを去り、ユカタン州の教育会議とフェミニズム会議の決議の実践は、アルバラドの後継者で後に知事となったカリージョ＝プエルトによってさら急進的な形で引き継がれた。第2回フェミニズム会議が開催されたモトゥルは、カリージョ＝プエルトと後にフェミニストとしてメキシコシティでも活躍する妹のエルビア・カリージョ＝プエルト<sup>25</sup>の出身地であり、合理主義学校が根を下ろしていた場所だった。ユカタンの社会変革の実験は、カリージョ＝プエルトの失脚により挫折するが、合理主義学校は、メナが全国に広げようとしてユカタンからモレロス州に中心を移し、その数は全国で300校を越えた。そして、メナが率いる合理主義教師同盟（Liga de Maestros Racionalistas）は、1934年の憲法第3条の改正に大きな影響をおよぼした。<sup>27</sup> 女子教育に関しては、フェミニズム会議でガリンドが提起した性教育とジェンダー役割の制度化は、公教育における初等教育の議論と実践の中で繰り返し出現する。

ユカタンの社会改革の実験は、革命動乱期のユカタン州の特別な展開と考えるべきではないだろう。国家再建の過程で女性解放や女子教育の指針とな

るさまざまな議論がフェミニズム会議に現れた。そして、それらの議論は1917年の家族関係法の成立にその成果を見ることができし、会議で取り残された出産調整や女性参政権の問題は汎アメリカ大陸会議の一環のフェミニズム会議第1回メキシコ大会において再度議論されることになる。ユカタンのフェミニズム会議において議論された公教育における女子教育の姿は、近代的公教育形成の過程に位置づけて考える必要があろう。

護憲派の州知事アルバドの諮問に対するフェミニズム会議の議論は、アルバドの意図に必ずしも沿うものではなく、条件付きの女性参政権と公立学校への合理主義教育の導入だった。しかし、合理主義教育のもとで宗教と分離した公教育が支持を得、その方策が具体的に検討された。女性を伝統的カトリックの規範から解放し、後に1917年憲法における公教育からのカトリック教会の排除へつながる方向が確定した。また、国家政策としての優生学的立場から、公教育における性教育がガリンドにより提起された。性教育に対しての拒絶反応は強く、会議では直ちに取下げられたが、国家と女性の生殖の権利をめぐる議論として非常に興味深い。さらに、女子公教育の概念を形成する上でも重要な議論が展開された。女性参政権運動に収斂するメキシコの第一波フェミニズム運動の先鞭をつけたものとしてフェミニズム会議が大きな意味を持ったことは、さまざまな女性学研究成果を見てもあきらかである。一方で、フェミニズム会議の女子教育に関する議論は、社会階級層別複線型であり、かつジェンダー複線型だった教育システムが、公教育として共学に統一化される過程で近代的なジェンダー規範を具体的内容として導入し、同じ学校の中で男女の教育目的が差異化され制度として定着するという学校教育のジェンダー化を後押しする結果を導くことになった。

## 注

1 Macías, Anna, *Against all odds, the feminist movement in Mexico to 1940*, Greenwood Press, Westport, Connecticut, London, England, 1982.

2 Soto, Shirlene Ann, *The mexican women: A study of her participation in the revolution, 1910-1940*, Palo Alto, California, 1979.

3 Tuñón, Julia, *Mujeres en México Recordando una historia*, Consejo Nacional para la

Cultura y las Artes, México, 1998.

4 松久玲子、「メキシコのディアス政権期における女性と教育」『言語文化』（同志社大学言語文化学会）第7巻、第4号、2005年参照。

5 メキシコ革命は、30年にわたるディアス独裁政権に対して、ディアスの再選阻止する反再選運動として始まった。1909年に再選反対党が組織され言論活動を活発化する。ディアスは、大統領選挙直前に大統領候補者のマデロを逮捕し再選を果たすが、その後釈放されたマデロは、アメリカ合衆国に亡命しサン・アントニオから武装蜂起を呼びかける。これに答え、1910年末からメキシコ国内の各地で反乱が勃発する。次第に、革命軍は政府軍を各地で打ち破り、ついにディアスはフランスに亡命する。しかし、国内に残るディアス派が反革命運動を起こし、それに乗じてウエルタがクーデターを起こした。ウエルタはマデロを殺害し、1911年2月20日に臨時大統領に就任するが、各地でウエルタへの抵抗運動が始まった。南部のモレロス州、ゲレロ州、プエブラ州ではサパタが、北東部のコアウイラ州ではカランサが、北西部のソノラ州ではオブレゴンが、そしてチワワ州ではビジャが、さまざまな主張を掲げた革命諸派が反ウエルタで一致して内戦を開始し、1914年、ついにウエルタは亡命した。ウエルタ亡命後、革命諸派で主導権をめぐる争いが始まる。反ウエルタ勢力の統一を目指し1914年秋に開催された「アグアスカリエンテス会議」で、農地改革を主張するサパタ、ビジャらの農民派は、グティエレスを臨時大統領に選出するが、それに異を唱えた護憲派のカランサは、ベラクルスに退却して臨時政権を樹立し、再びメキシコは国内を二分する内戦状態に陥る。その後、カランサが内戦に勝利し、憲法制定議会を召集し、1917年憲法を制定する。制憲議会は、反教権主義と民族主義および社会改革への熱意が支配した。1917年憲法制定により、武力を用いた諸勢力の衝突が一応の収束をみた。メキシコ革命は、デラウエルタによりカランサ大統領が暗殺された1920年から新たな段階を迎える。いわゆる国家再建の時代であるが、農民と下層大衆に支持されたサパタとビジャは連邦政府が送り込んだ軍により暗殺され、中間層を主力とする護憲派が主導権を得た。この国家再建期にオブレゴン、カリエス、カルデナスという3人の大統領の下で、1990年のPRIまで続く一党支配体制による革命の制度化が達成されていった。

6 INEGI, *Cien Años de Censos de Población*, México, 1996より。

7 Bazant, Mílada, *Hisotira de la Educación durante el Porfiriato*, El Colegio de México, 1993, p.91,94.

8 Ibid., p.266-267.

9 Macías, Anna, ibid., p.69.

10 Martínez Jiménez, Alejandro, *La educación primaria en la formación social mexicana 1875-1965*, UAM, 1996, p.94-99参照。

11 Loyo, Engracia, *Gobiernos Revolucionarios y Educación Popular en México 1911-1928*,

- El Colegio de México México, 1999参照。
- 12 Meneses Morales, Ernesto, *Tendencias educativas oficiales en México 1911-1934*, Centro de Estudios Educativos, México, 1986, p.159.
- 13 Ibid.,p.161.
- 14 Macías, p.62.
- 15 Alvarado, Salvador, *La reconstrucción de México*, 1919,299-309. 松久編、『メキシコの女たちの声 - メキシコ・フェミニズム運動資料集 - 』（行路社）2002、p.153より和訳引用。
- 16 1910年当時で、ユカタン州人口339,613人のうち、76,896人が農業労働者で、99,058人が家事労働者だった。Macias, p.63.
- 17 松久編、2002、ibid., p.132参照。
- 18 サバラ（1874 - 1956）は女子文芸学校を1897年に卒業し、小学校、高等小学校教師の資格をもつ。1902年に世俗教育、科学的近代教育に基づく学校を設立した。1912年に州知事からヨーロッパの教育視察に推薦され、マデロによりフランスに派遣された。1914年に第5回全国初等教育会議に出席し、1916年に第1回フェミニズム会議の組織委員会委員長を務めた。その経歴から、合理主義教育に好意を持っていた。1948年にイグナシオ・マヌエル・アルタミラノ賞を受賞した。（Aurora Tovar Ramirez, *Mil quinientas mujeres*, DEMAC.Mexico, 1996より）
- 19 *Congreso Feminista de Yucatán, Anales de Esa Memorable Asamblea*, Mérida, Talleres Tipográficos del Ataneo Pninsular, 1916.
- 20 松久編、2002、ibid., p.135-138に訳出。
- 21 Soto,p.52.
- 22 北條ゆかり「メキシコ革命期における女性の政治参加と組織化 初期フェミニズムの要求と実現への第一歩」、松久編、2002年、ibid., p.86-110.
- 23 *Congreso Feminista de Yucatán*, Voto particular de la profesora Señora Gregoria Montero de A., p.190-192.
- 24 松久編、2002、ibid., p.145.
- 25 松久「エルピア・カリージョ = プエルト - 社会主義フェミニストのさきがけ」、加藤隆浩、高橋博幸編、『ラテンアメリカの女性群像』、行路社、2003年、p.169-183参照。
- 26 1900年の初等教育就学率は、男女あわせて全国で33%にすぎなかった。
- 27 Loyo, ibid., p.82.



## La educación femenina y el Congreso Feminista de Yucatán durante la Revolución Mexicana

Reiko MATSUHISA

En Yucatán el Congreso Feminista fue promovido por el gobernador Salvador Alvarado y celebrado en 1916, a él asistieron muchas mujeres educadas, la mayoría de ellas profesoras que exigieron atender las resoluciones de igualdad de derechos entre hombres y mujeres e influyeron en la declaración de la ley de Relaciones Familiares integrada a la Constitución de 1917. Razón por la que este congreso ha dejado gran huella en la historia del movimiento feminista, imprimiendo además un carácter resolutivo en la educación femenina que encadenó una serie de congresos pedagógicos empezados desde principios del siglo XX para el establecimiento del sistema educativo nacional.

La labor del gobernador Alvarado a través de la consulta del congreso intentaba exponer los medios idóneos sociales para la liberación femenina del yugo de las tradiciones que significaba el catolicismo, el papel de la escuela primaria en la reivindicación femenina y las funciones públicas que desempeñan las mujeres. Al analizar desde el punto de vista pedagógica, todas las delegadas del congreso estuvieron de acuerdo con la necesidad de una educación no elitista sino para todas. El problema de la educación primaria femenina exigía la atención de su estudio. Destaca en esta labor Hermila Galindo quien propuso la idea del matorrimonio basado en el amor de ambos sexos y la necesidad de educación sexual para contribuir al progreso del país desde la eugenesia. Su discurso provocó gran polémica dentro de feministas; la idea del matrimonio por amor fue rechazada y confundida como “amor libre”. En el congreso también se discutió el

pensamiento de la escuela racionalista que optaba por la educación secular para disminuir la influencia religiosa en la educación pública. En la educación racionalista, las niñas aprendían desde actividades como arte culinario, olucicultura, farmacia etc. en un proyecto denominado Escuela-granja mixta, la cual proponía la formación de la buena ama de casa velando por el bienestar de la familia y la formación de las próximas generaciones, así mismo, sólo en caso necesario, esta formación podía ayudar a ser el sostén de la familia como educación vocacional.

Es importante destacar que de forma concreta la educación primaria femenina en la escuela pública fue principalmente para la formación de la ama de casa y adicionalmente como un medio para ganarse la vida. Las feministas trataron de contribuir a la construcción del país a través de su participación en la reforma educativa. Educar a la mujer nueva en la familia moderna cuya imagen es diferente de la mujer pasiva y tradicional en el catolicismo fue su labor. Simultáneamente las profesoras feministas contribuyeron a institucionalizar el papel del género en la educación primaria pública.

Women's education and the Feminist Congress in Yucatan during the Mexican Revolution

Reiko MATSUHISA

Keywords: Mexican women, the Feminist Congress, Mexican Revolution